

病院図書室のあゆみとその動向——文献から

兵庫県立成人病センター図書室

藤谷美智子

I はじめに

近年のコンピューターの加速度的発達 は機器の小型化と低廉化をもたら し、「情報化社会」という言葉が、単に情報量が多いという事だけでなく、コンピューターによる情報管理という意味でも非常に身近なものとして感じられるようになった。ここ数年間は各組織・企業等でもO A化が進んでいるようで、私が勤務する病院でも様々な部署で機器が設置され、情報管理という面からみれば、バラ色の観さえ受ける。然し乍ら病院図書室はどうであろうか。情報化社会のもう一つの側面である情報量の増大という視点から観る時、施設・資料・人のどれ一つをとってみても、とても増大化に対応できる態勢だとは言い難い。社会の情報化が進むにつれ、むしろその機能は低下しつつあると思われる程である。

一体このような病院図書室の貧困さはどこに由来するのか、図書室は病院内でどのように位置付けされ、歩んできたのだろうか。そしてどう歩もうとするのだろうか。病院図書室に勤務してやっと一年半、放置された儘の埃だらけの図書を前にした時からの疑問は、情報と利用者を結びつける最終目標をどう具体化し展開していくか考えていく上でも、押えておく必要がある。そこで病院図書室の歩みを辿り、当院の図書室をみることにする。

II 方法について

病院図書室は、図書館・情報学分野と病院医学、そしてそれら全体を包括する社会という四つの面から規定されるので、その歩みの全体像を把握するには、各々の観点から考察しなければならないが、文献も殆ど無く、私の手に余りすぎるので、ここでは歴史そのものは扱わず、これまでの病院図書室に関する文献・テーマを拾い出し、分析することにより、病院図書室のあゆみを概観することにした。

文献収集の選択方針

1. 主題について

病院図書室は医学図書館と患者図書館の二つの流れがあるが、ここでは医学図書館としての病院図書室を扱う。但し、患者図書館についての文献で、著者が医学図書館としての病院図書室に勤務している場合、又、その文献の収載誌が医学関係のものについては収集した。

尚、国立がんセンター図書室に関する文献は、センターが研究所的色彩が強く、一般病院のおかれている状況とかけ離れているので省いた。

2. 期間について

病院図書室に関する法規は1948年施行の医療法によるので、二次資料でも辿れる1950年～1984年までの35年間とした。

3. 収集資料の種類と形式

〔種類〕 図書・雑誌・抄録集

〔形式〕 論文・記事・学会発表

尚、近畿病院図書室協議会（以下、近図協と略す）発行の会報・病院図書室研究会（以下、病図研と略す）発行の「ほすびたる らいぶらりあん」は、今回省いた。但し、近図協発行の「病院図書室」はISSN番号もとっているので収集した。

以上の選択方針により、主に医学中央雑誌を中心に遡及検索した。1983年刊の「図書館情報学研究文献要覧1970～1981（20世紀文献要覧大系12）」にも目を通して見たが、殆ど収録されておらず、むしろ医学中央雑誌により多く載っていたので、他の資料も補いながら文献を拾った。従って、医学中央雑誌に収載されていないものもある。

Ⅲ 結果と考察

先ず、どのように病院図書室が広く認識されてきたか、その変化を把握するため、文献数と文献の形式別・著者（発表者）別に5年毎に集計してみた。（グラフ参照）次に何が問題となってきたか、文献テーマ別の集計もした。（表参照）

これらは、推移がよくわかるように、時代的考慮もなしに単純に5年毎に文献数をまとめたが、1970年代前半から漸く病院図書室に動きが見られ始めたことがわかる。更に1970年代後半から最近の5～6年間はその活動がめざましい。このことは、図書館界の動きを報告する「図書館年鑑」の“館種別にみた図書館概況”欄に、1982年版から病院図書館の紙面が設けられた事からも、病院図書室が図書館活動を行う主体として図書館界にも認められ始めたことがうかがえる。

次に文献の形式であるが、論文だけに限ると、数が限られ論文が出てくるまでの背後の

動きが掴みにくいため、学会発表も含めてみた。論文の形にならなくても、口頭での情報伝達もある状況を生み出していく過程では重要だと思うからである。グラフを見ると1970年代後半に学会発表形式のものが全文献数の約半数を占めるようになり、それまでとは正反対となった。

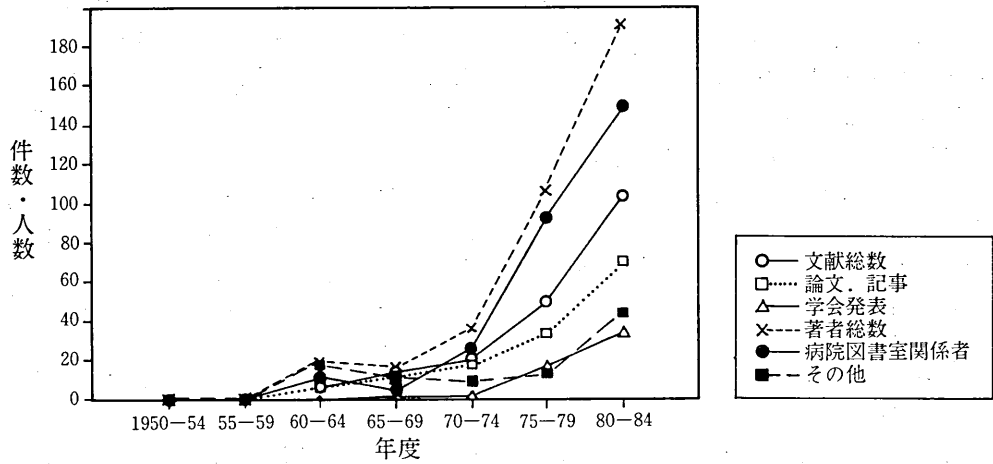
又、著者に就いても戦後から1970年代初めまでは、病院図書室関係者によるものは殆どなく、医師とか医学図書館関係者によるものが殆どであった。又、文献数に対する著者（発表者）の数は、学会発表が多くなった1970年代後半と同じく、それまでは1文献1著者が多かったのに、1970年後半からは1文献につき平均1.9名の共著者（発表者）がおり、研究し情報を創り出していることがわかり、病院図書室活動を支えている人たちの活発さがみられる。

次に文献のテーマに就いてみると、勿論全体としては圧倒的に図書室そのもの、全般に関わる事が多く、日常の業務に就いての個々の業務だけに関するものはそう多くない。只、その中でも相互協力・貸借、Reference Work、患者サービス等は他のテーマに比較すると割合が高く、病院図書室での関心の高さが窺われる。

以上、グラフ・表より概観を握んだが、今度は観点別にこだわらず流れを辿ってみる。

戦後初期、各組織体では様々にその復興が模索されたが、医療界でもその法的整備が図られ、病院は科学的な診療を提供する組織体としてあるよう、「総合病院は図書室を有すること」との医療法22条の規定を受け、一応総合病院は図書室を持つことになった。しかし、この頃は病院の診療態勢そのものに目が向けられ、病院図書室に関する文献は全く無く、漸く1950年「病院」誌上に村田 弘氏の“病院図書館試論”が掲載される。これは医学図書館としての病院図書室ではなく、患者

(表1) 年度別文献, 著者数 (グラフ)



(表2) テーマ別文献数

年	テーマ	図書室・全般	収集・受入	分類・目録	閲覧・貸出	相互貸借ネットワーク	レファレンスワーク	機械化機械検索
1950-54								
1955-59		1						
1960-64		5						
1965-69		9		1				
1970-74		4		1	1	3		3
1975-79		20	3	1	2	7	6	1
1980-84		41	7	4	5	15	7	7
計		80	10	7	8	25	13	11

年	テーマ	利用者	患者サービス	その他
1950-54			1	
1955-59				
1960-64			1	
1965-69			1	2
1970-74			4	4
1975-79		1	6	2
1980-84		3	8	6
計		4	21	14

のための病院図書室について言及したもので、医学図書館としての病院図書室に関するものは、1957年「医学図書館」に掲載された「病院 書室発達のために」が最初であった。ここでは、JMLA を中心とした医学図書館サービスの発達に較べて病院図書室の整備が遅れているので、その発達のために人と雑誌の配置・公開性・医学情報の中央化が提言された。各医局単位で保管していたカルテや図書・雑誌を「総合の実を挙げ妙を発輝するため」¹⁾ 中央に集めて管理すべきだというのがその論旨であった。図書館活動をその保管的機能の

みに限定しても、人もいず、雑誌も各科別々に置いてあるという非常に貧しい図書室像が浮ぶ。

この頃、JMLA では既に相互貸借が問題になっているのだから、福田氏のこの提言もやむにやまれぬ感があったのだろう。1960年代に入っては、「病院」誌上で患者図書館がとりあげられ、看護関係の雑誌では図書室の運営に就いての論文もみられた。そして1963年に漸く「病院」誌で医学図書館としての病院図書室がテーマとされた。1962年第41回日本病院協会診療管理部会のテーマとして開催されたシンポジウムで、各病院図書室の現状が管理者により報告されたものである。司会者がそこで述べているように、「必ずしも立派に整備されているということはない」病院の図書をPRする必要があったといえよう。いみじくも司会者が、図書室の整備ではなく、「図書の整備」と発言している点は、病院図書室の認識がまだまだ資料の側面からしか促えられていなかったことを示すものではなかろうか。勿論、司書の立場からはReference Work は図書室の当然のサービスとして、どう図書室活動にとりいれていくか模索されていたことが、1964年「医学図書館」誌上に載った朴木氏の論文³⁾からわかるが、近図協刊の雑誌総合目録と文編より調べた当時の「医学図書館」所蔵病院数 - 現在60機関中の3館のみ所蔵 - から推察すると、病院図書室関係者の目には一般的にはあまりふれなかったのではないかと思われる。

さて、1965年にはJMLA が大阪地区の医学関係図書室の実態を調査する。その結果、専任職員がいる病院は全体の19%で僅かなこと、また専任職員が配置されている所ではカレント雑誌も揃っていることがわかり、専任職員の有無が、図書館が機関内で組織的に主体性を有するかどうかに関ってくる⁴⁾と述べる。1963年のシンポジウムの認識と図書館界の認識とは多いに異なる。またこの年、国立京

都病院の森氏も全国の総合病院に対し、病院図書室の実態調査をした。全国的調査はこれが初めてであった。森氏はこの調査を通して図書室の基準を求めようと試みた。また文中、「図書予算中に看護関係も含まれるか」という見出しがみられるが、この頃の病院図書室は医師のみを対象としたものが大方であったようである。職種別利用頻度をみても殆んどが医師で、他は5~10%の利用率だそうで、今日の状況からみると雲泥の差である。ちなみに当院1年間の利用内訳は、医師32.7%、看護婦33.8%、検査部24.6%、その他8.9%である。

次に1969年「病院」は、「病院と図書館」を特集し、座談会「病院図書室の中央化」ではその貧しさが嘆かれながらも、図書室の利用対象者を看護婦にも事務職員にも拡げていくことを提言した。また5~6年前のシンポジウムとは異り、単に貸し出しだけでなく、文献探し - Reference Work の一つ - こそが図書室の本来の仕事であると述べた。そしてここでも資料の有効利用ということから図書室の中央化が言われているが、病院内にとどまらず、同一組織傘下の病院間でもそれを行なっている報告がなされているのは今までみられなかった事である。またこの号では、病院図書室の具体的な運営法にもページがさかれ、司書の立場からは、図書室が利用面から捉えられ、閲覧・貸出し・Reference・複写等に重点が移ってきていることが指摘された。次に1960年代末から1970年にかけては一部の病院で文献検索の機械化も試みられ、情報管理という言葉も使用されだした。「医学図書館」では1965年に「IRと機械化」をテーマに特集が組まれている。ところで1970~1974年間において相互貸借の文献がみられるが、これは一足早く病院間のネットワークを築いた国立医学情報センターの相互貸借による文献複写に関する報告があったからで、病院種を問わない、本格的な相互貸借に関する

文献が増加するのは、1975年以降である。さて、それに先立ち、1974年 京都・大阪を中心とした近畿地区で「会員相互の緊密な連絡と協力により病院図書室の充実、および医療情報活動に貢献することを目的」として近図協が結成され、且つ翌1975年には関東を中心にして個人加盟による病院図書室の集まりとして病図協が結成された。この両組織化の背景として後藤氏は、医学の急速な進歩による医療の高度化と情報量の増大、パラメディカルスタッフの新たな情報ニーズ、病院図書室の J M L A への参加不可による病院図書室同志の連携強化の必要性を挙げている。⁸⁾ これら二組織の結成により病院図書室の活動は、個々の図書室はともかく、図書館界という面からは画期的な転機を迎えることとなった。1975年「医学図書館」は、「病院図書室」を特集し、J M L A から病院図書室への関心がうかがえる。この特集で本田氏は、最終的には医療情報の全国的ネットワーク化が達成されねば、医療関係者が必要とする情報を司書が入手、提供できないであろうと指摘しながらも、結成された病院図書室の両組織を評価した。⁹⁾

また、川原氏も近病図協結成後一年間の活動情況と相互協力体制の現状と展望とに言及して、矢張り全国的ネットワークの必要性を訴え、それまでの間地域を基にしたネットワーク化をめざして大学の協力を求めた。そしてここでも指摘されたのは、専任職員が図書室に配置されず、担当者の配置転換も簡単になされるということだった。このような状況は、同氏の言われるように病院が図書室を単なる書庫としてしかみていない¹⁰⁾ ことを如実に示している。この問題は、これ以降の病院図書室に関する多くの論文・記事でも問題になり、同特集号に載った「東京・神奈川における病院図書室の実態調査」においても実証された。即ち職員1名の場合は受入整理業務が約全体の60%を占め、2名の場合は、そ

の上にレファレンスを加えて全体の60%となり、職員の複数をまわって初めて管理的業務からサービス業務へと移行することが業務分析により実証されたのである。¹¹⁾ これはいくら資料が増えても職員が増えない限り、図書室の機能は管理的業務に制限されてしまうことを示すものである。

さて、このように個々の図書室においては問題を抱えた儘だが、1974年を境に病院図書室が活発化し始めた。以降の文献数をみても、それを支える著者（発表者）をみても、それ以前とは相異が劇然としている。図書室全般に関する文献も一挙に5倍となり、相互貸借に関する文献も増加し、今までレファレンスに関した論文が全く無かったのに発表され始めた。一方、患者図書館に就いてもあまり病院関係誌上でとりあげられなかったが、1978年前後から再び問題にされだし、医学図書館界にも関心がみられだした。そして1980年代に入ると、文献数はそれ以前の5年間に較べ2倍近く多くなる。著者の総数も同様の傾向を見せる。また、病院図書室員以外の著者が文献に占める割合が再び増えるが、これは医学情報のネットワーク化が問題になってきたため、病院図書室の存在をも含めてネットワーク論が問題化されだしたことにより、医学図書館関係者や医師の側からの発言が増えたためである。

1983年からは J M L A に加盟していなくても、近図協、病図研を通して医学図書館員研究会に参加可能となり、参加者は論文を提出するので、事例報告のみでなく病院図書室の個々の業務に関する論文も徐々に増えている。近図協の統計によると、この10年間で加盟機関も2倍近く増え、病図研では30名の会員が100名近くなり、両組織傘下の図書室が増えた。それだけ、少しずつではあるが病院間のネットワーク化と担当者の資質向上が図られているだろうと推測できる。それは文献内容にも反映され、業務を分析したもの、参

考業務に関するものなど多岐にわたってきている。

ところで、1980年代に入っの顕著な特徴は、これまであまり文献のなかった機械検索、業務の機械化に就いてのものが増えたことである。しかし、Reference Work の件で人員が問題となったように、機械検索サービス導入に就いても担当者のことが問題となる。¹²⁾ 即ち病院は機器の導入には関心をもって、担当者の教育・研修には注意を払わないことが多い。近年、足立氏よりCML サービスがこれからの病院図書室の新しいサービスとして紹介されたが、これなど、より専任職員の有無・資質にかかわってくるもので、サービスの領域が広がるほど人員の問題が大きく図書室活動に影響し、十分な図書室とそうでない図書室との格差が拡大されていくのではないかと思う。

Ⅳ 当院図書室について

以上、紙面の関係上駆け足であったが、この35年間の文献から病院図書室の歩みを辿ってみた。1975年前後を境に、病院図書室は静から動へと移りだしたといえよう。

ところで、当院図書室はその間どうであったろう

1962年に財団法人兵庫県がんセンターとして出発と同時に図書室は独立したスペースこそは無かったが、職員が配属され、講習も受けて司書となり、図書室業務が一応の体裁を整えて運営された。¹³⁾ しかし、1971年兵庫県立がんセンターへと移管するのに伴い、司書は配置替えさせられ、病歴担当者が兼任することになる。図書の保管場所も担当職員の場所とは離れ、1984年成人病センターへと再出発するのに伴い、整理にかかるまでに紛失した図書は約2,300冊中300冊にものぼった。

また、担当者が兼任のため図書室の仕事は後回しになり、目録も不完全になり登録簿も信用できない内容となった。病院の外では、

相互貸借・機械検索とReference の拡がりもみせているのに、当室は1965年当時よりも後退してしまって、Reference Work 以前の最悪の状態であった。

Ⅴ おわりに

1950年からこの35年間の病院図書室の歩みで問題にされ続けてきたことは、資料・施設もさることながら、深刻なのは人員の件であった。数においても、また専門的知識の有無においても、種々なサービスの可能性が拡がるにつれ、この問題は図書室の機能を左右するだろう。人員の確保と担当職員の資質向上に病院が関心を払わない限り、病院図書室の貧困さは解消できないのではないか。医療法22条の内容改善が望まれる。

しかし手をこまねいているわけにはいかない。様々な機会を利用して自己研鑽に努め、業務の合理化を図って時間を生みだし、利用者サービスを提供することにより掘り起された利用者の要求が、また、図書室への要求となり病院の設置主体をも変えていくことになりはしないだろうか。

多難な仕事ではあるが、病院図書室員としての喜びも多く与えられるのであるから、頑張りたいものである。

[引用・参考文献]

- 1) 福田邦三：病院図書館の発達のために 医学図書館, 4(4):242-243 1957
- 2) 石原信吾他：病院図書室の管理 病院, 22(12):70-80, 1963
- 3) 朴木貞子：病院図書室-Reference Work 以前 医学図書館, 11(1):11-16, 1964
- 4) 大阪地区医学図書館協議会：医学関係図書室実態調査 医学図書館, 12(3):167-171, 1965
- 5) 森日出男：病院図書室の運営管理 病院, 25(6):50-63, 1966

- 6) 小野田敏郎他：病院図書室の中央化 病院, 28(2) : 19 - 26, 1969
- 7) 近畿病院図書室協議会：会則第2条
- 8) 後藤久夫：病院図書室 図書館年鑑1982 日本図書館協会, p. 146
- 9) 本田品子：病院図書室とネットワーク 医学図書館, 22(3) : 136 - 148, 1975
- 10) 川原佳子：近畿病院図書室協議会 - 現状と問題 - 医学図書館, 22(3) : 149 - 157, 1975
- 11) 病院図書室研究会：東京・神奈川における病院図書室の実態 医学図書館, 22(3) : 159 - 166, 1975
- 12) 足立純子：病院図書室におけるオンライン文献検索利用状況とその問題点 日本病院会雑誌, 30 (12) : 124 - 131, 1975
- 13) 秦 昌子：病院図書室の現況 医学図書館, 12(2) : 111 - 114, 1965

(註) この論文は、日本医学図書館協会第20回医学図書館員研究集会論文集に掲載されたものです。著者および日本医学図書館協会の諒解を得て、掲載いたしました。 (編集部)

